フィールド（現場）からの風 ⑲⑤

宮田守男

地域の中で献身的に活動している姿を伝える必要性について考えてみませんか

7月下旬、母が享年93歳で他界した。東北大震災での心の病かアルツハイマー病を患い、6年間辛い時期を過ごした。だが長男の奥さんの献身的な介護で救われた人生でもあった。長い人生は、語りつくせないドラマの連続だった。家庭外の社会活動で多くの人から語り継がれる人がいる反面、家庭を守り続けた母の事を家族や親族以外で、次の世代まで記憶に残り続けていただく事は至難の業だ。このコラムで書き残す、身勝手への批判を覚悟で書き残したいと書面に向き合った。

母は、白馬村飯森で2男4女のきょうだいの三女として生まれた。縁あって白馬村白馬町の父の所に嫁いだ。決して裕福な家庭ではなく、朝早くから夜遅くまで家庭と家族を守るために働き続けた。私の幼年期、既に地域の農家の生活様式が激変した時期、家の至る所に養蚕の「蚕だな」が占領。当時の蚕は、水分に弱く、エサの桑の葉を乾かす作業は家族総出だった。室内で、空中に数え切れない程投げ上げ乾かす作業は、子どもには辛い仕事だったが、母と楽しく過ごした時間でもあった。

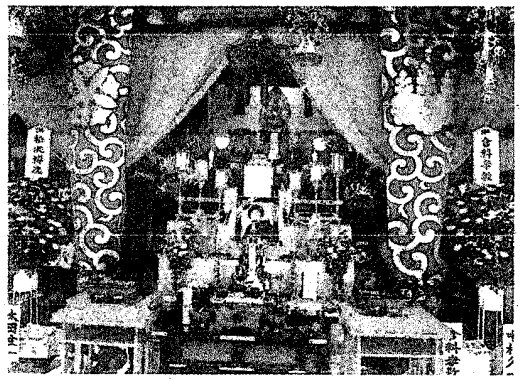
当時は、入浴するのも家族の順番が厳格な時代。当然、母が最後の湯を使った。次男も最後に近い入浴の順番。よく一緒の湯を使った。一緒に入浴し、色々な事を教えてくれた知識は、私の人生の貴重な糧だった。

40代初めに、病に侵され危篤の告知を何回か受け、これが最後の治療との医師の説明で施した一本の注射で奇跡的に病を克服。苦労を重ねた母を父は、国内旅行は勿論、アメリカ・フランス・スペイン・エジプトなど連れ添って海外にも出かけた。

父は、山案内人として家を留守することが多かった。帰る度に、山の素晴らしさを語る父。山稜を里から見る機会しかなかった母を労わりながら白馬岳に登山した親の姿を今でも忘れる事はできない。

……

菩提寺「長谷寺」、歴史を感じる寺構え、素晴らしい庭園で葬儀も荘厳な趣で執り行われる



葬儀が終わり葬儀委員長をしていただいた組長の方から、母を「地域の母」と例えて、母の生きた人生を語っていただいた。子どもとして、うれしくて自然と目頭が熱くなった。地域の中で、懸命に生き、地域に貢献している人は多い。多くの人の営みを、どの様に見つめ、どの様に伝えて行けるのか。その連続が、地域を活き活きと輝かせる事なのか、今一度考えなくてはいけないと母が語りかけたような、満足な人生を送った母を思い返せた葬儀でもあった。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）